草案本『正法眼蔵嗣書』断簡分施者【解説】

＊「香積寺副本」分施者部分画像

「香積寺副本」所収の「此書切渡シ申覚」には、「草案本嗣書」の分施者、並びに年次が記載されている。また、「草案本嗣書」謄写部分には、朱筆にて整理番号と行数が記録されている。

　　此書切渡シ申覚
一　　越前永平寺頓叟大和尚様〈正保四年／亥五月十九日〉渡し、」
二　　(記載なし)
三　　丹波随岸寺萬安大和尚様^、亥五月廿六日、
四　　六兵衛、
五　　京五条、　又兵衛殿、
六　　加賀大乗寺月舟和尚へ、寛文十二子五月」十クタリ、
七　　京三条、児玉昌慶ニ譲リ、寛文九丙七月、」五クタリ、(32ヶ)
八　　賀州、一中居士、
九　　八幡神応寺、
十　　賀州永光寺末寺、祐源居士建立寺、
十一　(記載なし)
十二　摂州住吉、元咄様、
十三　丹州随岸寺〈智仙様／懶禅和尚〉〈正保四年／亥六月廿八日渡ス〉、
十四　丹後宮津智源寺万水和尚、〈九クタリ、万安和尚添書付ル、／寛文十三年十月二日ニ寄進仕候〉、
十五　(記載なし)
十六　京五条、大浜三右衛門殿
十七　京五条、三之丞殿、江戸宗仙寺へ元通寄進令進候、
十八　京五条、大浜元海老、〈享保六年丑十月、／菅半叟老へ親父中陰ニ進候、
十九　武州大相寺雲竜和尚様、〈正保四年／亥五月廿六日〉、
廿　　江州大廣寺莫吟和尚様、〈年号日付／如前〉、
廿一　京二条、〈〻粕谷庄左兵門殿、／宗清〉、同、
廿二　京五条、宗仙寺其心和尚様、〈年号如前、／亥五月十九日〉、
廿三　山州皆見、〈〻孫三右衛門殿、／甫清也〉、亥六月十五日、」
廿四　京四条、弥三右衛門殿、
廿五　京五条、〈恕水事、次郎兵衛〉、
廿六　同、大浜次郎兵衛、〈慶安二己丑之年／九月廿七日ニ〉、〈宇治興聖寺へ／上ケ〉」
　合廿六所ニ有、クタリ数三百四拾四ナリ、
清源院安叟自穩上人〈寛永廿癸(ミツノト)未九月廿六日〉、

【「草案本嗣書」と「修訂本嗣書」】

「草案本『正法眼蔵嗣書』」（以下「草案本嗣書」）とは、仁治二年（1241）、道元禅師42歳の時、山城興聖寺において撰述された自筆本を言う。

※興聖寺蔵「草案本嗣書」断簡（奥書）写真挿入

「修訂本『正法眼蔵嗣書』」（以下「修訂本嗣書』」）とは、寛元元年（1243）越前吉峰寺において、「草案本」に増補改訂が加えられ、成立したものを言う。

※「修訂本嗣書」奥書写真または禅文化歴史博物館HPリンク

「草案本嗣書」の原装訂は、粘葉装であったと思われる。この写式については、香積寺蔵『正法眼蔵嗣書』副本（以下「香積寺副本」）が参考になる。書写の体裁は、毎半葉6行、毎行約15字、漢字平仮名交じり文、本文墨筆校注有り、朱書音訓あり朱書注釈（整理番号、行数）あり。

＊禅文化歴史博物館HPリンク

【「草案本嗣書」分施の背景】

「草案本嗣書」は、江戸時代前期に二十六に切断され、分施されたが、分截される以前は、京都五条の加賀屋大濱家が襲蔵していたものである。断截前の収蔵者は、香積寺副本所収「此書切渡シ申覚」末に見える「清源院安叟自穩上人」であり、寛永20年（1643）9月26日に没したことがわかる。また、神應寺所蔵「草案本嗣書断簡」軸裏識語に慶安4年（1651）春彼岸に際して、加賀屋次郎兵衛が安叟自隠上人菩提供養の為に寄進したとの記事が見え、その功徳主は、「此書切渡シ申覚」廿五、廿六に見える大濱次郎兵衛（恕水）であったと思われる。次郎兵衛は、慶安2年（1649）9月27日に、自ら分施した「草案本嗣書」断簡二部を、安叟上人七回忌菩提供養のために宇治興聖寺に寄進している。これより先、慶安元年（1648）淀城（現伏見区）城主永井尚政は興聖寺を宇治の地に再興せんとし、萬安英種を迎えて中興、五世住職に招請している。晋山開堂が行われたのは、折しも慶安２年年９月であった（本堂棟札）。草案本『正法眼蔵嗣書』を截断し、分施する事業に大きく関与したのは、興聖寺中興開山萬安英種及びその会下であった。「此書切渡シ申覚」に「丹波随岸寺萬安大和尚様」と尊称され、また、最大の49行分が分施されていることから、加賀屋大濱家との密接な関係がわかる。また、会下の弟子、随岸寺所住の懶禅舜融等にも分施されている。萬安、懶禅は、分施者に対し、「草案本嗣書断簡」に付帯して極書き等の文書を渡している。また、永井氏との関係は、寛文九年（1669）同族の永井尚征が宮津藩主となっているが、寛文13年（1673）10月2日丹後宮津智源寺万水和尚に対し、萬安和尚添書を以て寄進していることからも窺われる。草案本『正法眼蔵嗣書』の冒頭部分が永平寺北岸良頓に施入されたほか、京五条宗仙寺、八幡神應寺に分施されたのも、宗門に一定の配慮がなされたのと思われる。

※永平寺所蔵「草案本嗣書断簡」（軸装装丁あり）写真挿入

【「草案本嗣書」断簡分施先】

以下、分施者を中心に概観してみたい

1、＊永平寺第二十五世北岸良頓に、正保4年（1647）5月19日渡し。

→「香積寺副本」1～32行（32行分）相当。

①永平寺所蔵「草案本嗣書断簡」

＊永平寺二十五世北岸良頓（1586～1648）

天正14年生まれ、慶安元年6月15日示寂。正保三年（1646）12月28日、武蔵国龍淵寺より、永平寺第25世として晋住。「北岸良頓壁書」（永平寺所蔵『壁書之写』所収、正本は永建寺蔵）によれば、慶安元年3月28日、越前永建寺（福井県敦賀市）に壁書を出している。その一条に、「一つ、江湖遍歴の僧たる者、先規の如く十二時中措かず、座(坐)禅、参学、法門、不審の懸け脱け、代語等、専要たるべき事」とあり、永平寺における教学は、入室参禅を前提とする、法門、代語が修行の中心であった事が解る。北岸は、関東、並びに越前における天真派の教学の影響を受けていたと推定される。また、北岸は、五山版『山谷黄先生大全詩注』をはじめ、多くの典籍（内典・外典共）を施入している。因みに、龍淵寺（埼玉県熊谷市）は、かつて慈眼寺（福井県今庄町）末の天真自性派の寺院であり、後に徳川家康から寺領100石の朱印状を得ている（「徳川家康寄進状写」武州文書）。

2、記載なし。

分施者不明。

「香積寺副本」33～37行（5行分）相当。

3、＊丹波随岸寺＊万安英種、正保4年亥5月26日渡し

「香積寺副本」38～86行（49行分）相当。

※万安英種（1591～1654）

熊本大慈寺大焉広椿の法嗣。寛永13年秋、丹波瑞岸（巌）寺(京都府亀岡市)に住し、正保2年（1645）春、摂津住吉臨南庵を創し閑居した。慶安元年（1648）秋、山城淀城主永井尚政の外護を得て、興聖寺を中興した。後に「代語事件」と称される、曹洞宗宗学上の転換点において、大きな役割を果たした。月舟宗胡（後掲）も瑞岸寺の万安に参じている。

※丹羽随岸寺

丹羽瑞巌寺（京都府亀岡市）、山号竜峰山、現在臨済宗東福寺派。

『続洞上諸祖伝』巻四「興聖寺萬安種禅師伝」によれば、寛永13年（1636）、万庵英種は廃寺瑞巌寺の閑寂を愛して住した。正保４年5月26日時点で、万庵が瑞巌寺に住

していたことがわかる。後に無住となり、一時荒廃するが、東福寺僧見叟智徹が住持となり、寺運は興隆した。

4、六兵衛、渡し。年次記載なし。
「香積寺副本」87～99行（13行分）相当。

5、京五条、又兵衛へ渡し。年次記載なし。
「香積寺副本」100～119(20行分)相当。
→＊②永平寺所蔵「草案本嗣書断簡」100～106行(7行分)

※永平寺所蔵「草案本嗣書断簡」
京都五条在住、又兵衛に施与された「草案本嗣書断簡」は、更に分截されたが、その一部（7行分）は井伊家に伝来し、近年永平寺に寄贈された。付属文書によれば、伊井家襲蔵以前、天台宗医王山沙門が所蔵していたが、総寧寺37世成山台明がその道元真蹟を見て感嘆した。海蔵寺10世量外智丈もまたその書を見て讃嘆し、真情を吐露して、その譲渡を懇望した。そこで、良澄は、安永6年（1777）2月、智丈に寄附し、その由縁を記したという。また、嗣書断簡および良澄の文書を収める、外箱の裏書には、＊永平寺64世森田悟由が道元禅師の真蹟であることを記している。

［内箱表書］
「道元國師眞蹟」
［付属文書］
道元國師之墨字、天下稱難／得矣。余久藏一本。總寧寺／山和尚、見之余之壁上、感稱／不止。（一字空き）海藏丈公、亦見歎美。／然而是彼宗祖之真蹟、懇／求異他。乃詩偈述其意而／投余。余雖所珍藏、敢寄之／丈公、永附其刹、以期不朽、／畧記其事、併贈。安永丁酉／春二月／。（印）（印）」

道元禅師の墨蹟は、この世の中で得難いもとと言われている。私（良澄）は、道元禅師の書を久しく所蔵していた。総寧寺＊成(常)山台明は、私の居室の壁上にあったその墨蹟を見て、感嘆して止まなかった。＊海蔵寺量外智丈もまたこの書を見て感嘆讃美した。そして、この墨蹟は彼の宗祖（曹洞宗の開祖）の真筆であることから、譲って欲しいと懇望する事、尋常ではなかった。そして、智丈は詩偈を以てその真情を述し、私に送ってきた。私にとってこの墨蹟は秘蔵のものであったが、敢えてこれを智丈に寄贈し、長くその寺にあずけ、後世に残る様に期待した。いまその事情を略述し、墨蹟と共に贈る。安永6年（1777）2月、＊伝台教医王山沙門良澄、記す。

［外箱表書］
「承陽大師嗣書巻一節」
［外箱裏書］

（低二格）明治庚戌六月十一日／高祖承陽大師嗣書巻一節御眞蹟／（低五格）永平六十四代悟由證明」

＊成（常）山台明（？～1792）
大円頓能の法嗣。明和6年（1769）年5月13日、総寧寺37世を経て、安永9年（1780）10月13日、永平寺48世として晋住し、天明6年（1786）2月27日に隠居、後に江戸青山に閑居する。越後浄照庵開基。また、台明は、永平寺如意庵に「美味峰」の額を揮毫している。禅師号を「仏鎮護国禅師」と言う。寛政4年（1792）12月6日遷化。

＊海蔵寺量外智丈
海蔵寺（三重県桑名市北寺町）10世量外智丈（生没年未詳）。自山謙光の法嗣。

＊伝台教医王山沙門良澄
未詳。

＊森田悟由（1834～1915）
天保5年1月1日生まれ。金沢の天徳院において諸岳奕堂（もろたけえきどう）に師事し、名古屋陽泉寺の天瑞白竜の法をつぐ。明治24年永平寺貫主となり、同28年曹洞宗管長。『洞上行持軌範』の編纂、曹洞宗宗憲の制定など、曹洞宗の振興につとめた。大正4年2月9日示寂。82歳。号は大休。諡号は性海慈船禅師。

6、加賀大乗寺＊月舟宗胡、寛文12年（1672）5月渡し。
「香積寺副本」120～129行（10行分）相当。
→＊③大乗寺所蔵「草案本嗣書断簡」

＊月舟宗胡（ 1618~ 1696）
大乗寺白峰玄滴の法嗣。肥前（佐賀県）武雄の出身、俗姓原田氏。同地の円応寺（石屋派）華嶽宗藝に参じ、寛永年中、丹羽瑞巌寺（京都府亀岡市）万安英種に参じた。来朝僧の黄檗宗隠元隆琦、道者超元にも学んでいる。寛文11年（1671）大乗寺第26世として晋住し、曹洞宗復古運動の先駆けとなる活動を成した。延宝８年（1680)、後席を卍山道白に譲り、禅定寺（京都府綴喜郡宇治田原町）に退隠し、同寺を復興した。
＊大乗寺所蔵「草案本嗣書断簡」
軸装、嗣書断簡部分、縦23.3、横20.7㎝。断簡の下段には、万安英種の極書が貼付されており、道元禅師の真蹟であることは明白である旨を記す、

＊万安英種の極書
「道元和尚真蹟歴然也。多／以類筆考之、點無所／差矣。／（低三格）劣孫萬安埜衲（印)」

道元和尚の真蹟たること、歴然なり。多く類筆を以て之れを考うるに、点として差える所無し。

7、京三条、児玉昌慶に、寛文9年（1669）7月渡し。
「香積寺副本」130～134（5行分）相当。
→＊④香積寺所蔵「草案本嗣書断簡」

＊香積寺所蔵「草案本嗣書断簡」
軸装、断簡部分　縦22.7、横13.0㎝。断簡の下段には、＊興聖寺前住懶禅舜融の頌が貼付されている。
＊興聖寺前住懶禅舜融の頌
「道元遺墨、／分施諸人、／片言隻字、／要見芳塵。／（低一格）前住興聖藤木堂」
　道元の遺墨、諸人に分布す。片言隻辞、芳塵を見んと要す。

「香積寺副本」には、＊国泰寺第十一世＊笑（咲）堂行契（一六九六～一七六三）の跋文＊「書永平高祖嗣書巻後」（宝暦三年十二月吉旦）が収載されている。そこには、香積寺所蔵『正法眼蔵嗣書』草稿本断簡の来歴が述べられている。それによれば、安芸国の篤信の信者である名井宗範家には、道元禅師の親筆である『正法眼蔵嗣書』の一紙が、長い間所蔵されてきた。ある日、笑堂（私）に呈示して言うことには、この書は、京都の児玉昌慶より出たものであり、昌慶はこの書を友人より得て、秘蔵すること既に久しかったが、ある日、これを弟の浄有に渡与した。浄有は居を安芸の国府（広島）に移し、この書を襲蔵して年数を経た。そしてこの浄有こそが我が名井家の元祖である。私（笑堂）はこのことを聞いて、道元禅師自筆『正法眼蔵嗣書』の一紙を閲覧する機会を得た。大きな璧玉を獲得できたように、大いに感激したが、私がこの機会独占する事に忍びず、あまたたび鳳山（国泰寺山号鳳来山）に迎請して四方からやって来る雲衲にこの書を見る機会を作った、と言う。また、『正法眼蔵嗣書』草稿本一幅を収める＊箱書きによれば、天保五年（一八三五）二月、川口源右衛門は、「道元和尚御眞筆一幅」「證書壱巻」「箱」を香積寺に寄附しており、同寺二十七世志徹孝義が箱書きを記している

＊笑堂行契
「前總持笑堂契和尚塔銘并序」（『面山広録』巻一八、『曹洞宗近世僧伝集成』三二一～三二三頁所収）によれば、笑堂は、元禄九年（一六九六）二月二十三日に越前角鹿郡の生まれである。延享三年（一七四六）に芸州（広島県）国泰寺の住持となる。宝暦二年(一七五二)、道元禅師五百回忌を務め、翌三年、国泰寺を退院し、嶺雲院（白神六丁目、現広島市中区大手町）に隠居する。また、同年、尾道市済法寺の開山となっている。宝暦十三年（一七六三）八月十五日示寂。

＊国泰寺
鳳来山洞雲禅院と称し、開基は安国寺恵瓊、関ケ原の戦以後、広島城主となった福島

正則は、同母弟普照を招請して開山とし、臨済宗から曹洞宗へと改宗し、寺号を国泰寺とした。国泰寺の号は豊臣秀吉の諡号「国泰寺殿前太閤相国雲山俊竜大居士」による。寛永六年（一六二九）本山永平寺から僧録とされ、広島城下五ヵ寺の筆頭とされ、後に城下曹洞宗寺院一五ヵ寺の触頭となり、支配下の寺院は領内外合わせて一四〇ヵ寺にのぼった。

＊「書永平高祖嗣書巻後」
原文は以下の通り（『永平正法眼蔵蒐書大成』第二十一巻「七、正法眼藏序跋偈贊類」所収）。
（低一格）書永平高

祖嗣書巻後、」
欽惟、教外単傳古曲、嘗無異」韻、面授嗣法粹金、豈有変」色、與乾坤不老、竝日月永明。」（34ウ）苟其理論迷悟、於凡聖偏」執、斷続於古今者、不免損」佛祖性命、況復有趨利競」勢。因寺憑境、師資換易輩、是」（34ウ）謂闡邪途、種荊棘惑、行道」之士耳。吾□永平高祖、膺半」千氣運、具亞聖宗眼、擡巨」靈擘華之手、述面授嗣」（35ウ）書之旨、剗除蔓艸、不遺餘」力、非彼迷士之所、是指南乎大道、其音迹擴充佛祖憲」章範圍、厳峻鐵壁銀牆、渾」（35ウ）無滲漏、正法眼蔵名、豈不」偉乎哉。藝府信士名井宗範」家、久蓄□高祖親書嗣書巻」壱紙。一日呈山僧云、此書出于」（36ウ）京師兒玉昌慶。々得之友人、秘」蓄已久矣。一日出聧家弟淨有。」々後移床于此府、寶襲閲歳。」淨有者、乃吾家之元祖也。云云。（36ウ）山僧聞此事、因拜閲親書。」若獲拱璧、感懌交集、不忍」独持。乃迎請鳳山、數俾方来」雲衲、獲拜閲焉、猗歟、」（37ウ）高祖戢化、五百年于茲矣。片」言隻字、手澤淋漓、存于世」不朽。人々談之、則神意開豁、」不為無所獲也。宗不神物呵」（37ウ）護、其能如斯耶。倦々歸向、」不能護焉。信士因請記敬」書應焉。」
寶暦癸酉冬十二月吉旦」（38ウ）
前國泰十一世老頑契喚堂」敬識于嶺雲丈室
　　□（陽刻朱印「笑／堂」）□（陰刻朱印「行／契」）（38ウ）

＊箱書き
「道元和尚御眞筆一幅／并證書壱巻箱共／寄附　川口源右衛門／天保五甲午天二月大祥吉日／當山廿七世現住孝義代」

8、＊賀州一中居士、年次記載なし。
「香積寺副本」135～140行（6行分）相当。

＊賀州一中居士
未詳。

9、＊八幡神應寺に渡し。慶安4年（1651）2月春彼岸
「香積寺副本」141～149行（9行分）
→＊⑤神應寺所蔵「草案本嗣書断簡」（143～149行、7行分）

＊八幡神應寺（京都府八幡市）
山号糸杉山、応永15年(1408)曹洞宗へと改宗。無著妙融派下の柏巌妙英を開山とする。第12世弓箴善彊（？～1614）は豊臣秀吉の正室北政所（高台院、禰〈ねね〉）の帰依を得て、高台寺（京都市東山区）の開創に携わり、梵鐘銘の撰述、秀吉画像へ著賛を行っている。また、弓箴は、北政所に法名「快陽杲心」と血脈を与えている。慶長3年(1598)、弓箴は、神応寺を尾張（愛知県）正眼寺末とした。淀城主永井氏の一族と推定される、＊永井重良の外護を得ており（寛文3年3月2日付「祠堂田寄進状」)、寛文・元禄製作の五宗祖師像等、自筆の図像を寄贈している。神応寺は、宇治興聖寺と並び、洛南の曹洞宗二大名刹とされるが、ともに永井氏が外護者であり、密接な関係を有していたことがわかる。

＊神応寺所蔵「草案本嗣書断簡」
この「草案本嗣書断簡」は、「軸裏識語（その一)」によれば、慶安4年（1651）春彼岸に際して、＊加賀屋次郎兵衛が＊安叟自隠上人菩提供養の為に寄進したものである。また、檀越である大阪の豪商＊淀屋一族の祖桂大姉が表具を寄進したものである。「杉山神応六世伝璟叟代」とあるが、現在の歴住位次にその名は見えない。神応寺所蔵「草案本嗣書断簡」は、7行分が軸装されているが、分施時の状態とは異なる。「香積寺副本」141・142行部分に相当する「道元、この語をきくに、いさゝか領覽(リムラム)あ／り。いま江浙(カウセキ)に大刹(セチ)の主とあるは、おほく」の2行分を欠いている。神応寺収蔵後に切断され、更に分施されたものか。或いは＊神応寺30世日山海東の「軸裏識語（その二)」によれば、破損したものを修補したとするから、その時点で失われていたかは、判然としない。

［軸裏識語(その一)］
「日本初祖永平開山道元和尚大禅師御自筆也。／（低二格）爲安叟自隠上人菩提、加賀屋次郎兵衛寄進旃／（低二格）此表具者淀屋祖桂大姉寄進之者也。／杉山神應六世傳璟叟代。／于時慶安四年辛卯白仲春彼岸莫。／」
［軸裏識語(その二)］
「破損ニ付加修補、己巳秋、日山叟」

＊神応寺30世日山海東（1720～1807）
天明3年（1783)、神応寺晋住、寛政3年（1791）2月に退院。その間、多くの典籍を同寺に施入している。

＊永井重良(1637～1710)

永井権右衛門重良、法名一庵宗元居士。永井家墓所の位置、大きさから、神応寺において特に重要な外護者であることがわかる。また、京都大学建築系教室図書館所蔵『淀城大絵図』に描かれた永井権右衛門の屋敷地の規模から、淀城主永井家一族である事が推定される。

［墓碑銘］
《正面》「早世（一字空）圓成禪童子〈寛文十一辛亥年／八月廿三日〉（一字空）幽靈／歸寂(一字空）一菴宗元居士（一字空）覚霊／早世（一字空）幻空禪童子〈寛文十一辛亥年七月廿三日〉（一字空）幽霊／」
《側面》「宗元居士、俗姓永井氏、重良、寶永庚寅年九月二日逝」

＊加賀屋次郎兵衛
「香積寺副本」所収の「此書切渡シ申覚」に、「廿五、京五条、〈恕水事、次郎兵衛〉、／廿六、同、大濱次郎兵衛、〈慶安二己丑之年／九月廿七日〉、〈宇治興聖寺へ／上ケ〉」と見える。加賀屋（大濱）次郎兵衛は、号を恕水と号するか。加賀屋次郎兵衛は、安叟上人から第25切、第26切を受納している。次郎兵衛こそが、安叟上人供養の功徳主であり、安叟上人（加賀屋）所有の「草案本嗣書」の分施する事を決断したのではないかと想像する

＊安叟自隠上人
「此書切渡シ申覚」に、「清源院安叟自穩上人〈寛永廿癸（ミツノト）未九月廿六日〉」とみえる。寛永20年9月26日に亡くなった、加賀屋（大濱家）清源院安叟自穩上人の菩提供養の為、安叟上人が所蔵していた「草案本嗣書」が26切に切断され、分施されたと推定される。「香積寺副本」によれば、道元禅師の行状を書写したとされ、その写しが収載されている

＊＊淀屋一族の祖桂大姉
祖桂大姉については、未詳。
淀屋は、江戸時代前期の大坂の代表的な豪商。また、神応寺の有力な檀越。その墓所は、永井家墓所よりやや低い位置に所在し、淀屋二代言当（三郎右衛門、1577～1622、法名「玄个庵祖源道列居士」通称「箇庵」)、言当の弟五郎右衛門（寛永十一年〈1634〉没。法名「江樹道雲禅定門」)、淀屋三代重当（五郎右衛門の子、慶安元年〈1648〉没。法名「性源箇斎居士」、通称「箇斎」）の墓碑があり、やや離れて五代広当（辰五郎、～1707）の墓碑がある。
四代重当（元禄十年〉1697没）の後を継いだ、淀屋辰五郎は、豪奢な生活を送ったとされ、その生涯は脚色され、伝承化されている。淀屋は、宝永二年（1705)、辰五郎の代に、幕府より闕所処分（全財産の没収、所払い）を受け、店を閉じた。
淀屋初代常安は、豊臣秀吉のとき大坂に出て、材木業を営み、秀吉から淀川の築堤工事を請け負い、また大坂の陣の際、徳川家康、同秀忠にそれぞれ本陣を構築して献上するなどの功績により、特権商人の地位を獲得した。

二代言当（箇庵）は常安の長男。町人蔵元として諸藩の大坂廻米の販売を大規模に引き受け、のちの堂島米市場の濫觴ともいわれ、幕府、諸侯への貸金は巨額にのぼったとされる。箇庵は趣味の人でもあり、茶人として小堀遠州、松花堂昭乗らと親交があり、連歌をよくし、人物花鳥画を描いたとされる。

【淀屋墓碑銘】
「淀屋第二代墓碑」
　　寛永廿癸未暦
玄个庵祖源道列居士覚靈
　　十二月初五日

「淀屋第二代弟（三代目実父）墓碑」
（墓碑銘上部）
「鎮石報歸眞／證堅固法身／青天雖缺落／靈塔可無泯／」
（墓碑銘下部）
　寛永十一年季春十一日
為江樹道雲禅定門
　施主孝子建之

「淀屋第三代墓碑」
（墓碑銘上部）
「萬有悉消磨／一靈何覆蔵／浮幢王刹海／密々又堂々」
　慶安元暦
性源个齋居士
　戊子七月十二日

10、賀州＊永光寺末､祐源居士の建立寺に渡す。
→「香積寺副本」150～156行（7行分）
＊⑥永光寺所蔵「草案本嗣書断簡」

＊永光寺末､祐源居士の建立寺
祐源居士（未詳）が建立した寺院（未詳）に施入された後、本寺である永光寺に献上されたものと推定される。「箱裏識語」によれば、明和七年(1770)に永光寺第四九四世徳隠惠運が桐箱を新たに作り納めているので、あるいはこの時期に収蔵されたものであろうか。
　【箱裏識語】
　明和七年寅年十二月八日現住徳隠代新添
永光寺『〈延享度曹洞宗〉寺院本末牒』によれば、永光寺末の寺院で、加賀国（石川県）に所在するのは、伝灯院、弘昌寺、高源院、崇禅寺であるが、現時点ではいずれ

の寺院とも比定できない。

【『〈延享度曹洞宗〉寺院本末牒』】

永光寺末（中略）

一、加賀國河北郡金澤　　傳燈院

一、同國（加賀國）同郡同所　廣昌寺

一、除地、越前國敦賀郡今濱村　永建寺

一、加賀國河北郡金澤　高源院

一、同國（加賀國）同郡同所　崇禪寺

＊祐源居士

未詳。

11、記載なし。

→「香積寺副本」157～165行

12、摂州住吉、元咄様＊

→「香積寺副本」166～170行

→⑦円通寺所蔵「草案本嗣書断簡」＊

＊元咄

摂津国住吉住の元咄に渡された。元咄、渡与年次、未詳

＊円通寺

初め水戸常磐山に在った天台宗寺院を、文明十六年(1488)に江戸但馬守通泰が水戸市千波町に移転し、曹洞宗に改めて開山に獨放鈍聚を開山に請じて建立したとされる。

13、丹州随岸寺＊智仙様、＊懶禅和尚、正保4年（1647）6月28日に渡す。

→「香積寺副本」171～177行

＊⑧陽松庵所蔵「草案本嗣書断簡」

＊懶禅舜融（1613～1672）

万安英種の法嗣。宇治興聖寺6世。承応3年(1654）9月16日入院、明暦元年（1656）8月29日山崎不言寺に退居、寛文12年（1672）4月3日示寂。『興聖第五世中興万安種禅師伝』『日域曹洞列祖行業記』を著わし、南詢庵等に住した。法嗣に梅峰竺信(1633~1707）がいる。

＊陽松庵所蔵「草案本嗣書断簡」

陽松庵陽松庵（ようしょうあん）

大阪府池田市所在、退蔵峰陽松庵。静居寺（静岡県島田市）末、天桂傳尊埋葬の地。「草案本嗣書」7行分に次いで、萬安英種の極書きが軸装されている。道元禅師の真

筆であることは明らかだとする。
【萬安英種極書き】
「（低二格、以下同）永平道元和尚真蹟歴然也／以類筆考之点無差」

14、丹後宮津＊智源寺＊万水和尚、万安和尚添書付き、寛文13年（1673）10月2日寄進。
→「香積寺副本」178～186行

＊智源寺（山号、松溪山、京都府宮津市）
寛永２年（1625）5月、宮津城主京極高広が、その母惣持院殿松溪智源大禅定尼を供養するため、本寺である桂林寺一〇世心庵盛悦(1573～1657)を開山にむかえ建立した。寛文元年（1661）永平寺より丹後国の僧録所に任ぜられる。

＊万水太樹（～1674）
智源寺第5世。京都神勝寺開山。伝未詳。延宝２年6月12日示寂。

15、記載なし。
→「香積寺副本」187～192行
＊⑨禅定寺所蔵「草案本嗣書断簡」

＊禅定寺
京都府宇治田原町所在。大乗寺末の寺院。延宝年間（1673～81）加賀国大乗寺月舟宗胡を開山に迎え、曹洞宗に改めて再興。
＊禅定寺所蔵「草案本嗣書断簡」
分施の対象、時期共に未詳。軸装上部に「草案本嗣書」6行、下部に興聖寺現住懶禅舜融の添書を表装する。この頌は、香積寺所蔵「草案本嗣書断簡」の添書（頌）と同文である。
【懶禅舜融添書】
「道元遺墨／分施諸人／片言隻字／要見芳塵／（低二格）興聖現住芥室書（印)」

16、京五条、＊大浜三衛門殿に渡す。年次未詳。
→「香積寺副本」193～204行
⑩青龍寺所蔵「草案本嗣書断簡」

＊大浜三衛門殿
未詳
＊青龍寺所蔵「草案本嗣書断簡」
滋賀県大津市長等所在。同寺第五世龜峰光鑑（～元禄十五年〈1702〉）の代に、同寺什物（寺の宝物）とする。付帯文書に安政三年（1856）六月、江南隠士清水信衛の極あり。

【軸裏書き】
「道元和尚手跡一幅　江州江南山青龍寺五世龜鋒叟　當寺什物置焉」

17、京五条、三之丞殿に渡す。元通が江戸宗仙寺に寄進する。
→「香積寺副本」205～212行

18、京五条、＊大浜元海老に渡す。＊享保六年（1721）親父の中陰に際して、菅半叟老に寄進する。
→「香積寺副本」213～227行
＊⑪瑞雲院所蔵「草案本嗣書断簡」（213～221行 、6行分闕）

＊瑞雲院所蔵「草案本嗣書断簡」
山形県新庄市向陽山瑞雲院は、山形県白鷹町瑞龍院の末寺、新庄藩主戸次家の菩提寺。「草案本嗣書断簡」9行分、更に続けて懶禅舜融添書が軸装されている。香積寺、禅定寺、え書と同文。
【懶禅舜融添書】
「道元遺墨／分施諸人／片言隻字／要見芳塵／（低二格）興聖比丘懶禅書（印）」
＊大浜元海老
未詳。加賀屋大濱家一族か。
＊享保六年親父の中陰……
箱裏書きによれば、享保六年十月二十二日が、菅半叟の父の葬儀の日に当たり、大濱又右衛門尉範元所持の「草案本嗣書断簡」は菅半叟に付与されている。享保七年、興聖寺十三世蔵峰慧密は識語（蓋裏）を付し、更に外箱を新添している。
【箱裏書】
「此傳來、享保六年洛陽五條橋通不發門、大濱又右衛門尉範元所持也。同年冬十月念二、予在亡父之葬日、從範元被付與者也。　洛東少隱半叟手持」

19、＊武州大相寺雲竜和尚様 、正保4年（1647）5月26日に渡す。
→「香積寺副本」228～237行

＊武州大相寺雲竜和尚
未詳。

20、＊近江大廣寺莫吟和尚様に、正保4年（1647）5月26日に渡す。
→「香積寺副本」238～248行
⑫永田氏所蔵「草案本嗣書断簡」

＊近江大廣寺莫吟和尚
未詳

永田氏所蔵「草案本嗣書断簡」
永田義雄氏戦後購入とされる。大乗寺五二世得船弘濟箱書きあり。

21、京二条、＊粕谷庄左兵門殿（宗清）に、正保4年（1647）5月26日に渡す。
→「香積寺副本」249～260行

＊粕谷庄左兵門殿（宗清）
未詳。

22、京五条、＊宗仙寺其心和尚様へ、正保4年（1647）五月十九日に渡す。
→「香積寺副本」261～282行

＊宗仙寺
高倉通の東側に位置する。宗祖道元が京都に創設した三ヵ寺の一とする。洛中三ヶ寺（宗仙寺、慈眼寺、天寧寺）の一つ。寛正六年（一四六五）に京都所司代多賀高忠が六条高倉の地に建立、大平山宗仙寺と号し、天江東岳を開山とする。其心は中興に当たるか。「興聖寺文書」に「配下他國本末牒／武州三田海蔵寺寺末／益之派／同國愛岩郡／　　京五條　宗仙寺」と見える。

23、山州皆見、＊孫三右衛門殿（甫清）に、正保4年（1647）亥六月十五日に渡す。
→「香積寺副本」283～292行

＊孫三右衛門殿（甫清）
未詳。

24、京四条、＊弥三右衛門殿、
→「香積寺副本」293～302行

＊弥三右衛門殿
未詳。

25、京五条、＊〈恕水事、次郎兵衛〉、
→「香積寺副本」304～316行
⑬興聖寺所蔵「草案本嗣書断簡」（その一）

＊恕水事、次郎兵衛
大濱次郎兵衛（恕水）、分施の功徳主か。未詳。

26、同、大濱次郎兵衛、〈慶安二己丑之年／九月廿七日〻〉、〈宇治興聖寺へ／上ケ〉」

→「香積寺副本」317～348行
⑭興聖寺所蔵「草案本嗣書断簡」（その二）

＊慶安二己丑之年……
慶安二年（1649）、大濱二郎兵衛は25「草案本嗣書断簡」とともに宇治興聖寺に寄進する。

＊清源院安叟自穩上人〈寛永廿癸（ミツノト）未九月廿六日〉、

＊清源院安叟自穩上人
法名か。「草案本『正法眼蔵』嗣書」を所持しており、道元禅師の行状を書写するほどに関心を抱いていたと思われる。